学び続ける姿勢を育む授業とは

高寺直子

一はじめに

古典離れが叫ばれて久しい。私自身、学生時代に、「古文研究をしても就職にはつながらないからやめた方が良い」という趣旨の助言を幾度となく受けてきた。また、高等学校教員になってからは、中学校で古文嫌いになった生徒への、学習への動機付けに苦心してきた(注1)。そこで、本稿では、古文を身近に捉え、生涯にわたり興味を持ち続けるきっかけとなる場を目指し、実施した授業を報告する。

令和四年度から施行されている新学習指導要領により、高等学校一年生国語科の共通必修科目が、「国語総合」(四単位)から、「現代の国語」(二単位)と「言語文化」(二単位)へと科目構成が変わった。一年生の場合、上代から近世までの文学的文章を対象とした「古典」は、「言語文化」に吸収されることになる。「言語文化」では、近現代以降の文学も取り扱うため、自ずと「古典」を取り扱う時間の縮小が予想される。そこで、限られた時間で、より確実に古典文学に興味を持たせ、自律的に学んでもらうためにはどうしたらよいのか。

その手がかりと考えられるのが、新学習指導要領高等学校国語科編第3節国語科の目標1教科の目標に示されている言葉だ。改訂前には使われていなかった「生涯にわたる」というキーワードが繰り返され、学びとは、高等学校等の教育機関だけで完結するものではなく、授業を通じ一生涯を通して学び続ける姿勢を育む重要性が強調されている(注2)。

(1)生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
(2)生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
(3)言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

また、新学習指導要領の「言語文化」、2「内容」〔思考力、判断力、表現力等〕・B「読むこと」の(1)読むことに関しては、以下の目標を掲げている。

ア　文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。
イ　作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、

内容を解釈すること。
ウ　文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。
エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。
オ　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

とりわけ、従来の「国語総合」にはなかった「オ」は、古典を対象としていると考えられ、古典文学を含む日本の伝統に触れることにより、生徒が自身の生き方を考える機会をもたらす授業を目指すものと考えられる。

二　高校の授業から

【一】

はじめに、２０２１年度高等学校３学年で実施した「古典」（二単位）の授業について報告する。対象生徒のほとんどが専門学校進学を目指しており、受験科目に「古典」が含まれない生徒にとって、「古典」を学習する動機付けは無に等しい。そこで、古典作品を「生涯にわたって親しむ」きっかけ作りの場としての授業を目指し、『平家物語』「能登殿最期」の授業を行った（注３）。

授業で扱った部分は、「能登殿最期」後半、平家の人々が入水し、敗北が決定的になるなか、能登守教経が奮戦する場面を描いた「およそ～寄る者一人もなかりけり。」という場面である（注４）。

字面を追って教科書本文と脚注を読ませようとするだけでは、全く聞いてもらえない可能性があるため、これから社会に出て、生きていく上で参考になる心理展開等が含まれていることを強調しつつ、解説をするように心がけた。そのため、内容を、教経の心情「今日を最後」、「大将軍に組めごさんなれ」、「いまはかうと思はれけれ」の三部に分け、「心情」と「行動」の関係に注目させ、授業を行なった。以下は、板書した内容である。

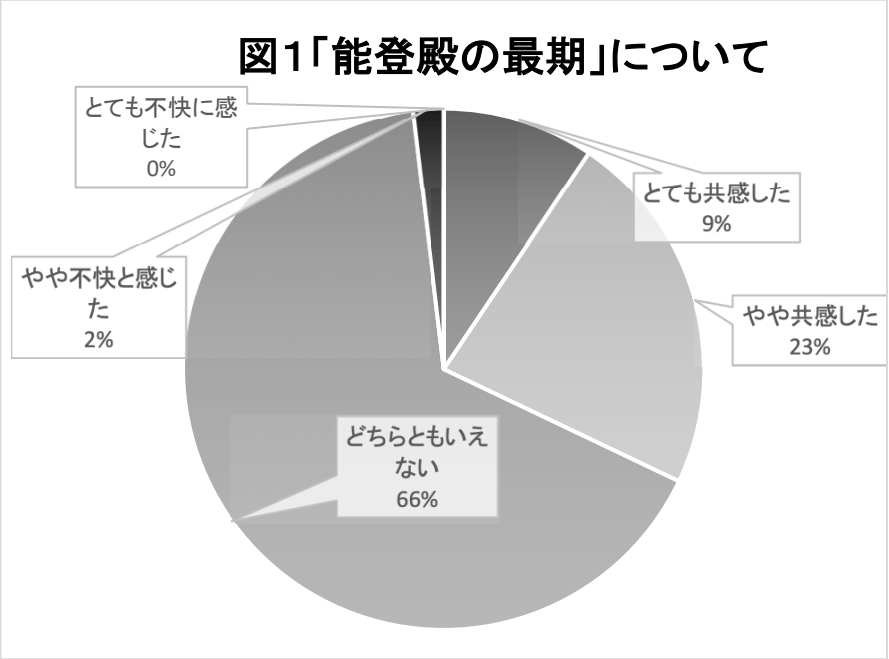
①能登殿の戦い1「およそ～多くの者ども討たれにけり。」
（心情）「今日を最後とや思われけん」
（行動）・矢だねのある限り射る。
・両手に太刀と長刀を持って切り回る。
→不特定多数・誰でもいいから多くの敵を倒したい。

②能登殿の戦い2「新中納言使者を立てて～やがて続いても飛び給はず。」
（心情）新中納言の「さりとてよき敵か」を受けて、能登殿

は、「さては大将軍に組めごさんなれ」と理解する。
（行動）・接近戦に備え、武器は短めに持つ。
・敵の船に自ら乗り込み、判官を探す。

③能登殿の戦い3「いまはかうと思はれければ、～寄る者一人もなかりけり。」
（心情）「いまはかうと思はれければ」と、判官と組討ちする最後の機会を逃し、これ以上戦っても仕方がないと、死ぬ覚悟を決める。
（行動）
・太刀、長刀を捨てる。
・甲も脱ぐ。
・鎧も草摺も捨てる。
・生け捕りにせよと呼びかけ、挑発する。＝攻撃も防御もしない。

以上の内容が、生徒に伝わったのかを確認するため、アンケート調査を行った。質問項目は、①「能登殿の最期」について、あなたの共感した度合いに応じて「✔」を付けてください。」と、②「この作品の魅力について、感じたこと全てに「✔」を付けてください。」である。①については、「どちらともいえない」が約66％を占めており、内容に興味関心を持ってもらえなかったことが伺える（図1）。



また、②の回答項目には、近年、生きる上で必要な能力とされる「GRIT」理論（注5、以下、「生き抜く力」とする。）に関する4項目（※印。生徒に質問する際には、「※」を付さずに行った。）を含めてアンケートを実施した。

②この作品の魅力について、感じたこと全てに「✔」を付けてください。

□「持つて」・「叫んで」などの音便を多用したリズム感あふれる文体

□琵琶法師による口承文学（口伝）である貴重さ

□「赤地の錦直垂」・「唐綾縅の鎧」などの華やかな衣装描写

□平家の敗北が濃厚な場面でも果敢に挑む能登殿（教経）の度胸※

□敵の大将軍を討つという目標を自分で見つける自発性※

□敵に逃げられても、諦めずに戦い続ける継続力（復元力）※

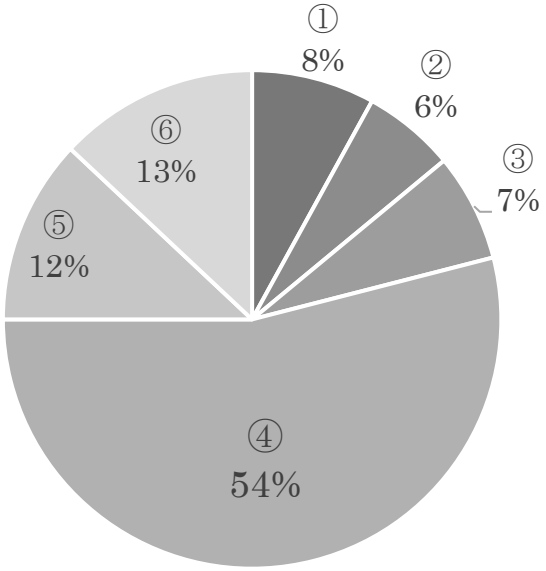
□敵二人を道ずれに入水という、最後までやり遂げる執念※

□無益な殺生を注意する新中納言（知盛）の冷静な判断力

□能登殿との戦いを避けて、舟から舟へと飛び移る判官（義経）の身体能力

調査の結果、「生き抜く力」に関する質問4項目に関して、共感したと答えた生徒が、54％と半数以上を占めた。以上のことから、教材に興味を持てぬまま受講していた生徒が7割もいたが、半数以上の生徒は、生き抜く力については感じ取ったと考えられる。つまり、「能登殿の最期」から、現代に通じる「生き抜く力」を

図２「能登殿の最期」の魅力



①「持つて」・「叫んで」などの音便を多用したリズム感あふれる文体
②琵琶法師による口承文学（口伝）である貴重さ
③「赤地の錦直垂」・「唐綾縅の鎧」などの華やかな衣装描写
④平家の敗北が濃厚な場面でも果敢に挑む能登殿（教経）の度胸※
敵の大将軍を討つという目標を自分で見つける自発性※
敵に逃げられても、諦めずに戦い続ける継続力（復元力）※
敵二人を道ずれに入水という、最後までやり遂げる執念※
⑤無益な殺生を注意する新中納言（知盛）の冷静な判断力
⑥能登殿との戦いを避けて、舟から舟へと飛び移る判官（義経）の身体能力

読み取れることを示唆している(図2)。

【二】

次に、2022年度高校1年生を対象に『平家物語』「遠矢」の授業を行った際のアンケート調査について報告する(注6)。対象生徒は、文理選択に向けて進路について具体的に考える時期にあり、その選択肢のひとつとして、探究し自分の考えを確立する「研究」について知ってもらうことを目的に授業を行った。探究し続ける上で必要な能力として伝えたかったのは、主に(イ)継続力・(ロ)俯瞰し応用する力・(ハ)自分の考えを確立するということだ。

時間の制約があり、特に(イ)継続力に焦点を当て、その教材として「遠矢」を選んだ。取り扱った個所は、『平家物語』巻第十一「遠矢」「源氏の方にも～手負ひにけり。」までだ(注7)。特に、和田小太郎が「やすからぬ事なり」と奮起する場面については、図3を示し簡潔な解説をした。なぜなら、短時間内での深掘りした解説や逐語訳は、古文への興味が削がれると判断したからだ。解説や現代語訳は最小限にして、「これからの社会で必要な資質や能力とは?」という問いについて、生徒自らが考える時間を設けた。

さらに、アンケートの質問は、古文未習の1年生であるということを考慮し、古典既習の3年生対象だった【一】では選択肢で回答を求めたのに対し、【二】では、回答の範囲を制限しない質問(オープンクエッション)とし、記述で回答を求めた。

図3「遠矢争い」壇の浦の合戦(1185年3月)の開戦直後は、平家方が優勢に見えた。そこで攻撃を仕掛けたのが、源氏軍の和田義盛であった。ところが、自信をもって射た矢が、平家側から鋭い威力で射返されたことに奮戦する。

[人物関係]

【 源氏 】①和田小太郎義盛　④三浦の石左近の太郎

×　←(挑発)　→(射返す)

【 平氏 】②新中納言(大将軍)→(命令)→ ③伊予国の住人新居の紀四郎親清

〝やすからぬ事なり〟

調査の結果は、(イ)・(ロ)・(ハ)の観点で大別した。調査の方法は、生徒が記述した文章データから、以下に挙げるキーワードがどれくらい使われているのかを検索をし、文脈を確認した上で分類した。結果は、以下の通りだ。

(イ)継続力[4]・続ける[4]・粘る、粘り強さ[2]・やめない[1]・諦めない[3]・執着[1]・忍耐力、耐力[3]

(ロ)柔軟[12]・臨機応変[6]・応用[6]・適用[6]・多様性[6]・広い視野、視野を広げる[5]・多角的[4]・多面的[1]・分析[5]

冷静、冷静沈着[3]、落ち着いて[2]

(ハ)自分の意見[6]・自分の考え[4]・自分らしさ[4]・自分なりに[2]・独自性、オリジナリティ[3]・特殊な考え[1]・枠にとらわれない[1]・自分の(が)したいこと[3]

(その他)a挑戦する[14]・積極性[6]
b体験[0]・共有[0]
経験…「いつもと違う立場を経験したことから何かを学び取る能力」・「経験や視点を変えて物事を見ていくこと」
cコミュニケーション能力[9]・問題解決[4]

調査の結果は、頻出順に、(ロ)の俯瞰し応用する関連は56語、(ハ)の自分の意見を確立する関連は24語、(イ)の継続力関連は18語、その他として、「挑戦する」などの積極性を示すものが20語、言い古された感のある「コミュニケーション能力」は「問題解決」については13語だった。ひとりの生徒が同じ言葉を繰り返し使っている場合もあり、一概に断言することはできないが、「広い視野を持ち、柔軟性を重視する」傾向にあることが分かった。また、「いつもと違う立場を経験したことから何かを学び取る能力」・「経験や視点を変えて物事を見ていくこと」という意見から、コロナ禍を経て、体験することの希少性や、経験の共有の重要性が再確認されつつあることが分かった。

三 まとめ ～ 社会人向け講座のアンケート結果から ～

それでは、高校での授業をきっかけとして、生涯にわたり学ぶ意志を維持してもらうにはどうしたらよいのか。

主に60歳代以上の方を対象に「学ぶ理由」について質問したアンケート(注8)から、解決の糸口を見つけたい。以下は、アンケート回答からの抜粋である。

「いろいろな知識を得たいと思っており、インターネット等で大概の情報は得ることが出来ますが、目からだけでなく声で聞くことの重要性を大切にしております。」(70～79歳)
「賢くなるというよりは人生をより豊かに楽しくするためには、学ぶことは大切。いろいろなことを知ると、ニュースを見ても新聞を見ても次々とその背景、影響など自分なりの判断力が身につき楽しめるし、視野が広がり多様性の必然が認められる。」(70～79歳)

つまり、対面で話を聞くという体験の重要性、作品や社会情勢などの背景・影響を知った上で、自分の考えを深めることの必要性に触れており、従来の対面授業の利点を確認できる意見で

ある。

以上のことから、授業時に、教員による解説やクラスメイトの反応を、直接見聞した上で、学習者自らの考えを、発言や記述等の外化を通し、自分の考えを認識し振り返る機会を、授業時間内に設けることが、次の学びのきっかけにつながると考える。

また今後の課題として、学習への動機付けが薄い生徒に対して、古文の場合、例えば現代語による全訳をどう扱うか、引き続き試行を続け、学ぶことが一生涯の習慣になる仕掛けを設けた授業を目指したい。

［ 参考文献・注 ］

1 文部科学省　中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語ワーキンググループ第４回配付資料
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369033-6.pdf(２０１６年２月)

2 文部科学省　高等学校学習指導要領比較対照表【国語】
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407085_2.pdf(２０１８年７月)

3 大阪府立渋谷高等学校74期3年生古典Ｂ α（２０２１年６月）で実施。

4 『平家物語』の本文は、「日本古典文学全集『平家物語』2」（１９９４年８月）による。授業では、理解しやすいよう漢字・平仮名の表記を適宜改めて提示した。取り扱ったのは、以下の巻第十一「能登殿最期」後半部分である。

「およそ能登守教経の矢先に回る者こそなかりけれ。矢だねのあるほど射尽くして、今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧着て、厳物作りの大太刀ぬき、白柄の大長刀の鞘をはづし、左右にもつてなぎ回り給ふに、面を合はする者ぞなき。多くの者ども討たれにけり。新中納言使者を立てて、「能登殿、いたう罪な作り給ひそ。さりとてよき敵か。」とのたまひければ、さては大将軍に組めごさんなれと心得て、打ち物茎短に取つて、源氏の舟に乗り移り乗り移り、をめき叫んで攻め戦ふ。判官を見知り給はねば、物具のよき武者をば判官かと目をかけて、馳せ回る。判官も先に心得て、面に立つやうにはしけれども、とかく違ひて能登殿には組まれず。されどもいかがしたりけん、判官の舟に乗り当たつて、あはやと目をかけて飛んでかかるに、判官かなはじとや思はれけん、長刀脇にかい挟み、味方の舟の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりととび乗り給ひぬ。能登殿ははやわざやおとられたりけん、やがてつづいてもとび給はず。いまはかう

と思はれければ、太刀、長刀海へ投げいれ、甲もぬいですてられけり。鎧の草摺かなぐりすて、胴ばかり着て大童になり、大手をひろげてたたれたり。凡そあたりをはらッてぞ見えたりける。おそろしなンどもおろかなり。能登殿大音声をあげて、「われと思はん者どもは、寄ッて教経にくんでいけどりにせよ。鎌倉へくだッて、頼朝にあうて、物一詞いはんと思ふぞ。寄れや寄れ」と宣へども、寄る者一人もなかりけり。

ここに土佐国の住人、安芸郷を知行しける安芸大領実康が子に、安芸太郎実光とて、卅人が力もッたる大力の剛の者あり。われにちッともおとらぬ郎等一人、おととの次郎も普通にはすぐれたるしたたか者なり。安芸の太郎、能登殿を見奉ッて申しけるは、「いかに猛うましますとも、我等三人とりついたらんに、たとひたけ十丈の鬼なりとも、などかしたがへざるべき」とて、主従三人少舟に乗ッて、能登殿の舟におしならべ、「ゑい」といひて乗りうつり、甲の鍬をかたぶけ、太刀をぬいて一面にうッてかかる。能登殿ちッともさわぎ給はず、まッさきにすすんだる安芸太郎が郎等を、裾をあはせて、海へどうどけいれ給ふ。つづいて寄る安芸太郎を、弓手の脇にとッてはさみ、弟の次郎をば馬手の脇にかいはさみ、一しめしめて、「いざうれ、さらばおのれら死途の山のともせよ」とて、生年廿六にて海へつッとぞいり給ふ。」

5 GRIT(グリット)とは、アメリカの心理学者のアンジェラ・リー・ダックワースが提唱した言葉だ。Guts(ガッツ)は困難に立ち向かう「闘志」、Resilience(レジリエンス)は失敗してもあきらめずに続ける「粘り強さ」、Initiative(イニシアチブ)は自らが目標を定め取り組む「自発性」、Tenacity(テナシティ)は最後までやり遂げる「執念」で、以上の4単語の頭文字をあわせて GRIT(グリット)と呼ばれる。

6 大阪教育大学附属高等学校池田校舎67期1年生「現代の国語」(2022年9月)で実施。授業名は「現代の国語」だが、様々な体験談を、教科担任以外から聴くことを目的に、主題は近現代の文学作品に限定しなくてもよいとのことだったため、『平家物語』「遠矢」から、自信をもって行動した結果が予想外であった場合の対処法や、やり抜く粘り強さを知ることを目標に授業を行った。

7 『平家物語』巻第十一「遠矢」

「源氏の方にも、和田小太郎義盛、舟には乗らず、馬にうち乗ッてなぎさにひかへ、甲をばぬいで人にもたせ、鐙のはなふみそらし、よッぴいて射ければ、三町が内外の物ははづさず強う射けり。そのなかにことにとほう射たるとおぼしきを、「その矢給はらん」とぞまねいたる。新中納言これを召し寄せて見給へば、白箆に鶴の本白、鴻の羽をわりあはせてはいだる矢の、十三束二伏あるに、沓巻より一束ばかりおいて、「和田小太郎平義盛」とうるしにてぞ書きつけたる。平家の方に勢兵おほしといへども、さすが遠矢

射る者はすくなかりけるやらん、良久しうあッて、伊予国の住人新居の紀四郎親清召しいだされ、この矢を給はッて射かへす。これも奥よりなぎさへ三町余をつッと射わたして、和田小太郎がうしろ一段あまりにひかへたる三浦の石左近の太郎が弓手の肘にしたたかにこそたッたりけれ。三浦の人共これを見て、「和田小太郎がわれに過ぎて遠矢射る者なしと思ひて、恥かいたるにくさよ。あれを見よ」とぞわらひける。和田小太郎これを聞き、「やすからぬ事なり」とて、少舟に乗ッてこぎいださせ、平家の勢のなかを、さしつめひきつめさむざむに射ければ、おほくの者ども射ころされ、手負ひにけり。」

8 令和4年度武庫市民大学(第2回)第2回「『平家物語』と「鎌倉殿の13人」～文覚・坂東武士を中心に～」(２０２２年6月)『平家物語』に描かれる文覚と北条時政や三浦義澄ら坂東武士についての話しをした。その際に「学び続ける理由」について質問した。これらの回答は、今後、高校や大学での授業計画や、学習者への動機づけに、参考にすべき意見だと考える。

「少しでも有意義な時間を過ごしたく、また、充実したい。」(70～79歳)「この時間が空いている、講義を受けないよりベター、自己満足。」(70～79歳)「人間として、日本人としての品格向上。」(80歳以上)「生活時間の有効な活用と社会的、文学的なことを学び直して心の糧としたい。」(70～79歳)「いろいろな感覚を持っていたい。」(70～79歳)「いろいろの(ママ)情報が理解しやすいため。」(80歳以上)「学習は学生の特権ではありません。常に学習です。自分を高めるのは自分です。何をするか目的意識を持ち学習することが肝要だと思う。継続は力です。」(70～79歳)

9 古典を「読む」授業へ―「木曾の最期」を例として―　小助川元太「軍記と語り物」第五十八号(２０２２年3月)

※アンケート調査に際し、大阪教育大学附属池田校舎秋長幸依先生、竹内優姫先生、尼崎市武庫地域振興センター武庫地域課太田哲夫様に多大なるご協力を賜りました。ここに謝意を表します。